

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 25 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12246

研究課題名(和文) 認知症を有する後期高齢がん患者の人生の最終段階を支える看護のモデル化

研究課題名(英文) Developing a model of nursing to support the final stage of life in late-stage elderly cancer patients with dementia

研究代表者

森 万純 (Mori, Masumi)

大分大学・医学部・助教

研究者番号：60533099

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)： 認知症を有する高齢がん患者が人生の最終段階を自分らしく生きることを支える看護のモデル化に取り組んだ。在宅で生活する認知症高齢がん患者とその家族を支援する医師および看護師等のケアを参加観察、インタビューし、事例について経時的に調査・分析した。その結果、認知症を有する高齢がん患者・家族介護者に対する人生の最終段階を自分らしく生きることを支える看護では、本人の意思と覚悟を聴き取り最期まで支え続けること、代理意思決定した場合は家族の意思と覚悟を支え続けることや、症状や苦痛の判断が難しい場合の対応は多職種と評価・判断し、苦痛緩和を常に行いながら、家族が行うケアも保証し続ける必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は認知症を有する後期高齢者のがん医療・看護の現状と課題を多角的に捉え、認知症とがんを併発した高齢者が人生の最終段階まで自分らしく生きることを支える看護を探究しモデル化する。このような高齢者に対する看護実践には、医療ケアチームの力が欠かせないが、認知症とがんという複合的な状態にある高齢者に対する看護の実際と多職種連携をモデル化した研究はほとんどない。本研究により、認知症を有する後期高齢がん患者に対する医療・看護の問題の明確化と人生の最終段階まで自分らしく生きることを支える看護ケアを可視化でき、認知症を有するがん終末期高齢患者の看取りケアのエビデンスを臨床に生かしていくことが可能と考える。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study is to develop a model of nursing that supports elderly cancer patients with dementia to live their own life until the final stage. Participant observation and interview survey were conducted on the care of medical staff such as doctors and nurses who support elderly patients with dementia late-stage cancer living at home and their families. After that it was investigated with the passage of time about a target case and it was analyzed.

As a result, in nursing that supports living in the final stage of life for elderly cancer patients with dementia and family caregivers, listening to the will and resolution of the person and continuing to support until the end. We medical professionals continue to support the will and resolution of families. And to evaluate and judge that the Interprofessionals when dealing with cases where it is difficult to judge symptoms and distress. And they assure the care provided by the family while always relieving distress.

研究分野：看護学

キーワード：認知症 高齢者 がん看護 人生の最終段階

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1) 病院における認知症を有する高齢がん患者に対する医療と看護の実態

認知症は、中等度になると周辺症状の出現や身体機能の低下により、日常生活動作全般に援助が必要となる。しかし、認知症を有する高齢者ががんに罹患した時、医師や看護師はどのように患者の状態をアセスメントし、治療選択を支援するかケアの実際が明確化されていない。

2) 在宅における認知症を有する高齢終末期がん患者に対する医療と看護の課題

高齢社会の到来により在宅医療が推進される時代となり、在宅における終末期ケアを必要とする患者や在宅で看取られる患者も増えている。認知症は進行すると、意思決定能力の低下や経口摂取が困難となる。さらにがんを併せ持つ場合、複合的な症状や障害は避けられず、死に至る過程も複雑になると推察する。今日の社会動向や医療の現状を考えると、認知症を有するがん高齢者が人生の最終段階まで自分らしく生きることを支える看護ケアの構築は責務であると考えられる。

2. 研究の目的

中等度から重度の認知症を有する後期高齢がん患者に対する医療および看護の実態を明らかにし、人生の最終段階まで自分らしく生きることを支える看護のモデル化を目的とする。

3. 研究の方法

1) 第1段階〔構造化面接調査；認知症後期高齢がん患者に対する医療と看護の明確化〕

(1) 研究目的

認知症を有する後期高齢がん患者の治療を行っている在宅診療所や訪問看護ステーションにおける医療・看護の実態を明らかにする。

(2) 研究方法

対象・研究方法

九州・中国地方の在宅医療専門医および在宅診療所の看護師、訪問看護師（各1名）にグループインタビューおよび個別インタビューを実施した。

分析方法

回答内容をICレコーダーに録音、逐語化し、認知症を有する高齢がん患者へのケアに関する内容を抽出、質的に分析を行った。

倫理的配慮

対象者には研究の趣旨・方法、匿名性の遵守、研究参加と途中辞退の任意性等を口頭と文書で説明し同意を得た。所属大学の倫理委員会の承認〔承認番号:1207〕を得て実施した。

2) 第2段階〔参加観察/半構成的面接；在宅で生活する認知症高齢の終末期がん患者の看護ニーズの明確化〕

(1) 研究目的

在宅医療専門クリニック医師・看護師や訪問看護ステーションの看護師、薬剤師の訪問に同行し、事例に沿って高齢がん患者への医療・看護の実際と認知症を有する高齢がん患者の看護ニーズを明らかにする。

(2) 研究方法

対象・調査方法・内容

在宅医療専門クリニックの医師および看護師や訪問看護ステーションの看護師、調剤薬局の訪問薬剤師の訪問に同行し、看護実践やかかわりの実際を参加観察および聞き取り調査し、対象の在宅療養者の治療経過は診療録から収集した。

分析方法

各専門職のケアをフィールドノーツに起こし内容を抽出し、質的分析を行った。

3) 第3段階【認知症を有する後期高齢がん患者に対する人生の最終段階まで自分らしく生きることを支える看護のモデル化】

(1) 研究目的

在宅で生活している中等度から重度の認知症を有する後期高齢がん患者に対する人生の最終段階まで自分らしく生きることを支える看護ケアのモデル化を行う。

(2) 研究方法

第1～2段階の成果をもとに、在宅医療専門医、訪問看護認定看護師、がん看護専門看護師、老年看護学とがん看護学の研究者で多角的に看護ケアをモデル化する。

4. 研究成果

【第1段階の研究成果】

在宅診療専門の医師2名（訪問診療経験9年、8年）と看護師4名（訪問看護経験7年、6年、3年が2人）であった。

1) 認知症を有する高齢がん患者の診療の実際

(1) 在宅診療専門医

「正直言って、在宅の現場では、病院のように認知症の型を診断しないことが多い。認知症の種類によってがんやその他の診療が大きく変わることはほとんどない。認知症だから、がんだからと言って、標準治療ができることの方が稀。」や「患者の苦痛を取り除くことを重要視している。」という回答であった。

(2) 認知症を有する高齢がん患者のケアの課題

在宅診療専門医

医師がとらえる認知症を有する高齢がん患者のケア上の課題として、『症状マネジメントと管理の難しさ(症状を的確に捉えることが難しい)』、『加齢変化と共に複合的な疾患を併せ持つことで、身体機能や認知機能の変化の予測が難しい』、『独居や高齢者夫婦の場合、家族や親族を含めた合意形成の必要性』の3点が明らかとなった。

看護師

看護師がとらえる認知症を有する高齢がん患者のケア上の課題として、『症状マネジメントと管理の難しさ(症状を的確に捉えることが難しい)』と『心身の状態観察およびその変化を多職種と共有し、異常の早期発見につなげる』の2点が明らかとなった。

(3) 日頃の診療や看護活動で心がけていること

在宅診療専門医

医師が認知症を有する高齢がん患者の診療で心がけていることとして、『本人・家族の願いや希望を聴くこと』、『本人・家族の意思を認め、支え続ける姿勢』の2点が明らかとなった。

看護師

看護師が認知症を有する高齢がん患者の看護活動で心がけていることとして、『可能な限り本人が望む場所で今までの生活を大切にしたい療養ができるように支える』と、『心身の状態観察を多角的に行いその変化を丁寧に捉える』の2点が明らかとなった。

2) 分析・まとめ

在宅診療の専門医は、疾患に応じた標準治療ではなく、『症状マネジメント・管理に徹する』や『在宅療養者と家族の意思を認め、支え続ける姿勢』を主眼に置いていた。一方、看護師は

症状観察の難しさを感じながら、『心身の状態観察とその変化を丁寧に捉える』『在宅療養者が望む場所での生活の継続』を主眼に置いていた。認知症やがんを一括りにせず、一人の在宅療養者とその家族が疾患にどのように向き合っているのか探求し続けること、彼らの安寧な生活をどう支え続けるかが、在宅医療を専門とする在宅ケアチームで共有し、考えることを基盤としていた。認知症とがんを併せ持つ高齢者へのケアは、まだ手探り状態であり、彼らの人生の最終段階をどう支えるか、在宅ケアチームのケア方法の確立が急務である。

【第2段階の研究結果】

調査事例は、消化器がん3名、呼吸器がん2名、認知症の程度は5名ともFASTの分類ステージ4~6、要支援2~要介護5であった。

1) 対象者が自分らしく生きることを支えるケアマネジメントの実際と課題

上記5名の事例をとおして、対象者が自分らしく生きることを支える医療従事者としてのケアマネジメントの実際として3点明らかとなった。1点目は、医師は症状コントロールだけではなく、訪問時に家族や医療ケアチームに対して病状や今後の経過を含めた合意形成を行うこと。2点目は、医師・看護師は患者の病状変化に応じて揺れ動く家族の気持ちを受け止め、一度意思決定した内容であっても変更しても良いことをはっきりと伝え保証すること。3点目は、すべての医療従事者が最期まで患者を看取するという覚悟を持ち、患者の希望を叶える使命と責任感を持つことであった。

また、在宅医療ケアチームのケアマネジメントの実際および課題としては、以下の5点が明らかとなった。1点目は、単純な日常生活を丁寧に行えるように支援すること。2点目は、最期を看取るのは家族だという意識を持ち、家族の成長を促すこと。3点目は、家族に対する安心感の提供とともに患者の生活の視点から現状を聞き取り、家族も含めて一緒に看ること。4点目は、安全、安楽の確保と保持を常に支援すること。5点目は治癒困難な疾患に対してどのようにチームで立ち向かうかを考え続けることである。

2) 在宅で生活している認知症を有する高齢がん患者の看護ニーズ

上記5名の事例中1名(D氏)の事例を主として、在宅で生活している認知症を有する高齢がん患者の看護ニーズを明らかにした。

(1) 事例紹介(D氏)

- ・既往歴：高血圧症、骨粗鬆症(79歳)、間質性肺炎(80歳)、肺炎、腰部圧迫骨折(82歳)
- ・生活史：夫と死別後、9年間独居生活。肺炎と骨折を繰り返し、ADL徐々に低下。その後6年半、週3~4日通所介護を利用しながら息子夫婦と新たな地で生活していた。亡くなる5ヵ月前、D氏も住んでいた地で娘(F氏)夫婦と同居することになった。

(2) 家族介護者(F氏)

- ・元中学校教師(4年前退職)。介護日誌を毎日記しており几帳面な性格。夫と2人暮らし。
- ・X年1月、肺の腫瘍影を指摘されたが入院を嫌がる本人の思いを考え精査しなかった。
- ・X+2年7月、D氏の肺腫瘍影増大と骨転移が出現し、兄と相談し本人に病名を告知した。

(3) 認知症高齢がん患者D氏の経過、家族介護者F氏の経験と看護の実際

看取り5ヵ月前、F氏は、母の意思決定能力を物忘れ症状や病状説明時の理解度に戸惑いながら本人に病名を告知していた。また、入院は嫌という母の思いや以前の検査で苦しむ母の姿や体験を思い出し、家族で今後のがん治療を決める治療の代理意思決定を行った。母の病状が進む中、F氏の介護継続の意思は揺れ動いたが、母の願いと家族の後押しにより決意した。

看取り3ヵ月前、F氏は痩せた母を心配し、懸命に介護した。看護師は医師と食欲低下の

原因を追究し、内服の変更を行った。F氏は、すぐ横になれる環境が大事だと考え、ベッド上で食事を取らせていた。しかし、看護師から普段のように食卓で食べること、車椅子での外出や通所介護の再利用を提案され、自分の介護のやり方に気づきはじめた。看取り2か月前、F氏は予期せぬ排便性ショックに動転しつつ、通所介護に通う母の様子から、今後の介護のあり方を考えていた。この時期、F氏の介護継続を支えたものは、戸惑いながらも看護師とのつながりから安心を感じる関係の構築であった。看取り7日前、母のむせ込む様子と痛みの増強に困惑し、3時間おきに看護師に連絡した。徐々に母親の死期を感じながらも最期まで意思を叶えようと決意し、母の望みだったトイレでの排泄を支援した。F氏は刻々と変化する症状に戸惑いながら、在宅医の支持や看護師の連絡・訪問支援を受け最終的に自宅で看取った。

(4) D氏およびF氏に対する訪問看護の実際

看護師が、治療や療養場所の意思決定についてD氏の意味とそれを汲み取る家族の力をどのように捉えたかは不明だが、F氏の症状を病態や食事摂取量、声かけの反応、歌う様子から判断し、全身状態を見極めていた。看取り3か月前、F氏の言動、訪問時に歌を歌う姿や自室に閉じこもって過ごす様子からF氏のニーズを次のように分析していた。F氏の介護に対する強い思いから、D氏の意味が形成・表明されにくいのではないかと判断した。また、疼痛コントロールができれば、D氏の望む生活(通所介護の利用)を叶えられるのではないかと判断した。看取り2か月前、食欲低下の原因探索、疼痛アセスメントにより内服薬の変更や脱水を考慮した補液の実施等によりF氏の病状の安定を図るケアが行われた。さらに、F氏に対しては普段の生活様式で良いこと、D氏の意味形成・意思表明を探り、外出の提案や緊急時の迅速な訪問、緊急時の連絡対応により家族の対応の後押しや安心感をもたらす看護が提供されていた。

(5) 在宅で生活している認知症を有する高齢がん患者および家族の看護ニーズ

看取り7日前からは、家族介護者F氏も徐々に母親の死期の迫りを少しずつ意識している様子もあり、刻々と変化する状態に動揺を感じていた。しかし看護師は、それは当然な介護者の反応だと捉えていた。F氏の現状介護への労い、F氏の判断で鎮痛剤の追加投与を医師と共に保証していた。これらのことから、看取り7日前からは、認知症に関わらず、D氏の反応を踏まえながら看護師とF氏の客観的観察と推定意思から予測的な症状緩和やケア提供の必要があることが明らかとなった。認知症を有する高齢がん患者・家族介護者への看護では、本人もしくは代理意思決定した場合は家族の意思と覚悟を支え続けること、症状や訴える苦痛の判断が難しい場合の対応を多職種と考え、苦痛の緩和のケアを常に行いながら、家族のケアも保証し続けることが重要であると考えられる。

【第3段階の研究成果・今後の課題】

前期は、前年同様に認知症を有する高齢がん患者の医師・看護師による訪問診療、訪問看護に同行し2名の対象者のケア場面の参加観察を行った。医療ケアチームが行う認知症高齢がん患者の医療・看護の実際について事例ごとの経過を追った。後期は今までの研究対象者の事例をもとに認知症を有する高齢がん患者に対する人生の最終段階まで自分らしく生きることを支える看護ケアのモデル化に向けデータ整理を行った。しかし、現時点で看護ケアのモデル化までには完全には至っていない。そのため、引き続き今まで得られたデータをもとに研究分担者と協力者とディスカッションを繰り返しながら、認知症を有する高齢がん患者に対する人生の最終段階まで自分らしく生きることを支える看護ケアのモデル化の作成を目指すまで本研究を継続する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森万純、三重野英子、小野光美、末弘理恵、寺町芳子
2. 発表標題 認知症を有する高齢がん患者を看取った家族介護者の経験と看護の実際
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森万純、三重野英子、末弘理恵
2. 発表標題 認知症を有する高齢がん患者の在宅療養を支える医師と看護師のケア認識
3. 学会等名 第37回日本看護科学学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	三重野 英子 (Mieno Eiko) (60209723)	大分大学・医学部・教授 (17501)	
研究分担者	寺町 芳子 (Teramachi Yoshiko) (70315323)	大分大学・医学部・教授 (17501)	

6. 研究組織 (つづき)

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	末弘 理恵 (Suehiro Rie) (30336284)	大分大学・医学部・教授 (17501)	
研究分担者	濱口 和之 (Hamaguchi Kazuyuki) (60180931)	大分大学・医学部・教授 (17501)	
研究分担者	甲斐 和歌子 (Kai Wakako) (10761562)	大分大学・医学部・助教 (17501)	2017年3月7日削除
研究分担者	小野 光美 (Ono Mitsumi) (20364052)	大分大学・医学部・助教 (17501)	2017年5月9日追加